
遊戯王 LEGENDs ～伝説の名の元に～

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS ～伝説の名の元に～

【Nコード】

N1158Y

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行ったり、遊戯王やったり、デュエルモンスターズやったり、決闘したり……………。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ…………通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる皆。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブラマジとブラマジガールだった――。

『遊戯王 僕らの進んで行く道』と並行して連載することになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思ってますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

—— 事実は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだったんだよね。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行った言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございました」

ビバ、現実逃避

遊戯王チーム、LEGENDS・伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動っていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向き、デ

ユエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。
メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割されてた。

「あゝ……ねみい」

せのハジメ
瀬野基。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄く荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう？」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ！ とは言わないし言われもしないだろう。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね」。僕も楽しみで眠れなかったよ！」

はせヶケイ
コイツは長谷部慧。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合うんじゃないだろうか。

何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「んなことより、早く行こうぜ？」

そして俺、いちのせトウヤ一ノ瀬燈夜。メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやってます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさっ。3人みたいに顔が良いって訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょ……良く鈍感って言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなっ……つか、ちけえよっ！」

「あぁっ」

なんでそんなに残念そうなんだ！？

そんなんだからマン研（マンガ研究会……という名の腐女子の集まり）にネタにされんだよっ！ 無駄に絵が上手いのがさらにム力つく！

……閑話休題。何言っただか、俺。

『——やっと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの音が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とうとう俺も厨二病か！？

「誰だっ！」

と思ったら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至っては、何故か俺に抱きついてるし。

「皆にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だった」

「だな……」

「うん……」

…… 4人全員聞こえたって事は、ただの厨二病の症状じゃないってことだよな……一体何なんだ？

『私たちの為に、戦って欲しいのっ！』

「うわっ！？」

こ、今度は女性の声……！？ しかも、どこかで聞いたことのあるような……！？

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

——基が、ばたりと倒れた。

「基っ！？」

そして、幸仁が。

「幸仁……！」

最後に、崩れていくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなって——。

次の瞬間だった。

頭が少しずつぼーっとしていく感覚。身体力が無くなっていく感覚。

数分後。

その場には、誰も居なかった。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「…………現実逃避して良い？」

「…………え？」

——ここ、どこだ？

朝なのか昼なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめると、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々なところが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろつ。若しくは夢だ、間違いない。

そう思っ^{ねじ}て俺は頬を抓る。捻るように引^{ねじ}張った。

「…………ひたひ」

馬鹿な……そうか、これは痛みのある夢なんだ！

『お目覚めですか』

「うひゃあっ!？」

だ、誰だっ…………!？

視線を後ろにやると、誰も居ない…………訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

…………。

「夢だ…………目の前に《ブラック・マジシャン》が居るなんて夢だ…………っ!」

通称BM。アニメでパンドラって奴が使ってたギャル風BMじゃなくて、普通の……普通のって言うのも変だけど……武藤遊戯が使ってたBMだ。

つまりは……マハードだ、うん。

『おはよう、マスター♪』

「……は？」

……え。まさか、そんな。

ブ……………！

「《ブラック・マジシャン・ガール》！？」

『マナって言いまゝす！』

にっこり。あ、可愛い。

じゃなくて！ え、つまりどういうこと！？ つか、その服、カードで見てた時もエロいなあ、なんて思ってたけど……実際見るともっとヤヴァイ……！！

「やっぱ……夢だ……」

しかし、夢でもブラック・マジシャン・ガールBMGに会えるなら別にこのままでも……げふん、げふん。

『夢では有りません』

「いやいやっ！ これが夢じゃければ、何が夢なんだよ！？」

『ん、将来の夢？』

……間違っではないけどさ。

「……万が一……万が一、これが夢じゃないとしたらさ……なんで俺を呼んだんだ？」

『マスター……燈夜殿には、世界を救って頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う？」

そりゃ、アニメではそんなこと起こってただけさ。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からないだね。なんか突然、色んな世界が崩れ始めちゃって……既に2つ、滅んじやった世界もあるし』

は……滅んだ世界？ 世界ってやっぱ複数あったのか？ 小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思ってたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるってことは、その世界に住んでいた人たちは死んじやったってことだ。

残念ながら、BMとBMGの表情は重い。とても嘘を吐いているようには見えなかった。

「マジ……なんだよな？」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界はデュエルモンスターズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じゃないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精霊界ってところだろう。アニメで見た風景よりもちょっと違うけれど、BMたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいなデュエルモンスターズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじゃない方なんだろう。

そして、何よりも……BMは言った。世界を救って欲しい、と。

原因が分からないのに世界を救って欲しい……ってことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよ。マスターなら世界を救ってくれる、って！』

「……買い被りすぎだろ……ん？　なあ、つーことは慧たちも……？」

『彼らも世界を救ってくださる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちではございませんが』

ってことは、あいつらもこの世界のどこかに……。俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとに、夢とかじゃ無いんだよな？」

『うん、夢じゃないよ？』

「……………はあゝ」

おーけー、夢じゃない。信じよう。BMGが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。

ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。

アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》……もとい、マハードとマナの導きによってこの見知らぬ世界に降り立った。

観衆の元じゃなくて良かった……なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。

BMやBMGの名前はアニメで出たマハードやマナだけど、王様
が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が
別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハードとマナは真正正銘、俺が初めてのマス
ターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲1つ無
く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかに揺れる。

「そついや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年!？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ
月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そうなのか。

はあ……しつかし、やっぱり夢じゃなかったんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズが中心
の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付
けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。

……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「さて……これからどうすつか………」

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

このままじゃ、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きゃっ………！」

「ん………？」

女性の声………？

きよろきよろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「……………」

連れ込まれた………？

助けに行かなきゃ、という気持ちと怖い、という心が交差する。俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりゃ、助けたいさ………けど、“昔”とは違うんだ。“昔”みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ………普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

——こんな身体になっちゃって……。

「俺は………」

——燈夜に愛される資格、無くなっちゃった。

「……………」

——バイバイ。

「……チイツ！」

何、迷ってたんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞっ!?

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まってしまうそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。

1つはピンク色だし、女性のやつだろうか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切られ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えた。

プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……楽しいことしてんじゃねエの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なっ、なんだお前……!？」

「んなもんでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめえら」

「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか？ 最後なら別に良いぜ？」

茶髪がそう言うと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まっていく。

「なら、俺も混ぜてもらっかな……」

近付く。片手で女性を触ろうと、俺は手を――。

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはっ!？」

「て、てめ……がっ!」

「ぐふっ……!？」

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻っ柱をグーで殴る。ざまあ見る。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとした表情の女性は少し可愛らしいけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫？」

「は、はい……」

「そう、良かった。立てる？」

コク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持って、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」

「あ、あ？」

やべ、スゲー殺気立った声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がっていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、展開させていた。

「おい、デュエルしろよ」

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかった……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝ったら女を置いてけとか、そんな感じ？ そんなんぜってーヤダね。

とは言え……。

（ここ、遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない）

「ごめん、俺、デュエルディスク持ってないんだよね……借りて良い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が——」

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と」

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな………それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持って来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによって勝手にシャッフルされる。LPが4000と表示され、その下にあるランプが光った。

……4000？ マジで？ 無いわ！。

………それにしても。

（………何、このランプ？ 充電切れ？）

「チッ、先攻はお前かよ………」

「仕方ないじゃんか。あっちのターンランプが光ったんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじゃない？」

………ご説明どうも。

んじゃま、

「デュエルっ！ ——って言えばよっ！！」

………あ、すみません。

「……現実逃避して良い？」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいッス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だったんです」

「えと……俺のターン、ドロします。スタンバイ、メイン入りします」

「あの……何言ってるんですか？」

「へ？」

……えつと、言うの、変？

うう……地球じゃこれが普通だったしなあ……アニメみたいにデユエルすれば良いんだよね？　ってことはアレか、効果とかも説明するのか？　たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」

「……アイツ、なんか変じゃね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おお、フィールド魔法は横に差し込む場所があったのか。そういやアニメでもそうだったな。

辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整った。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」

「ちっ……厄介だな」

まあ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなったりしたら意味なくなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなっちゃう。

ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター0↓1。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー行けぜっ！」

元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。

「《ジェネティック・ワーウルフ》召喚！」

おお、純粹に強い。

下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持っているモンスターだ。

……ちなみに、遊戯王カードWikiでこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ううん……いいや。俺のターン、ドローっ」と

ライフ……4000だろ？ あれ、つか何で攻撃しなかったんだ？ 伏せカード警戒？ 俺なら攻撃するのに……まあ、プレイングは人それぞれだしな。

……一言言っと。

……結構チキン？

「あの伏せ……気になるから、割りに行かかね。俺はまず、速攻魔^{サイク}

法発動！ その伏せカードを対象にする！」

「チツ……リアクティブアーマー《炸裂装甲》が」

……《炸裂装甲》？ 《次元幽閉》じゃなくて？

……まあ、良いけど。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター1↓2・

うーん……このまま熟練の効果使いたかったけど……ライフ40
00だし、別に良いか。

「リバースカードオープン、ディメンション・マジック速攻魔法！ 自分フィールド上に魔法
使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリース
して手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

……説明って疲れるなー、ったく。

「《熟練の黒魔術師》をリリースし、《ブラック・マジシャン・ガ
ール》を特殊召喚！」

『はい！』

はあ、癒される……。

なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪
がマナを見つめている。

……茶髪、いつの間に起きたんだ？ 三沢みたいなエアーマンだ
な、お前。

「ど、どうして《ブラック・マジシャン・ガール》が……？」
「……なんか悪いの？」

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードです！
世界で1枚しか作られていないカードですよ……！」

え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者が……？ いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし
……」

偽者なんて失礼な。

「まあ、気を取り直して……さらに《ディメンション・マジック》
の効果は続く！ お前の場に居る《ジェネティク・ワールフ》
を破壊する！」

「チツ……」

良し、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナー！」

『はい！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！ 自分フィールド上に《ブラック・
マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブラ
ック・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説の
カードまで！？」

……ブラマジもか。デッキに3枚投入してますけど、何か？

「来い、マハードっ！」

『はっ！』

やべ、デュエルディスク使ったのデュエルって楽しい！ テンション上がるな、コレ！

場にブラマジとブラマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン？ で見るとスゲエ……良い！！

「バトルっ！ マナで相手プレイヤーに直接攻撃！ —— 黒・魔・導・爆・裂・破——！」

「うあああああっ！」

金髪LP4000↓2000.

「トドメ！ マハード……！ —— 黒・魔・導——！」
「あああああああああああああっ——！！！」

金髪LP2000↓0.

「……大袈裟じゃね？」

しかし、本当に気絶しているらしい男たち3人を見て、俺は凄くスカッとした気分になった。

「……ふわ」

なんて間抜けな声が出てしまうくらい、今、俺が居る家は大きかった。

それこそ、アニメや漫画、後はTVの中でしか見た事が無いくらい大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。つまりは、

「君って、お嬢様だったんだな……」
「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。

無駄にふかふかなソファに座って、俺は驚きに顔を歪めている。向かい合う形で座っている襲われていた女性はふるふると首を振った。

「私の事は結姫^{ユウヒ}って呼んでください」

「じゃあ、結姫……さん？」

「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなあ。

彼女の名前は咲^{さき}之^{のみ}宮^{みや}結姫^{ユウヒ}。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！ あのままだったら、今頃……」

「気にすんなって。当然だろう？」

とか言って、最初はビビりまくりだった俺。けれど、目の前に居るのは凄い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？

ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄くさらさらしてる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。

ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言ったら良いか……」

……まあ、気持ちは分らないけど。

けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちっと罪悪感がなあ……ごめん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのっ、今日は泊まって行きませんか!？」
「はっ？」

この子、突然何をつ？

「お礼したいんです。今日はたっぷりお持て成しさせてください!」
「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」

「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません!」

……それ、もっと拙ますくない？

「それとも……迷惑、ですか？」

う……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな」
「はいっ!」

…………断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちょっとドキツとした俺。
勿論、それは秘密だけれど。

——それから、凄く大変だった、と言付けしておく。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言うにはちょっと……なんつか、个性的だったし、結姫の部屋で一緒に寝よう、と言われて一悶着あったし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入って少ししたら、背中をお流ししますとか良いながら結姫が入って来るんだもんな。勿論、バスタオル1枚を羽織っただけの姿で。

……アレは焦った。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座っていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつうか、ちょっと豪華なところ以外は“普通”の女の子の部屋だった。

妙にドキキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待っていると、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待たせしました……」
「……うう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまう。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなって、結姫より先に布団の中に潜ってしまう。勿論結姫の場所を空けてだが。

力チ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になっていると、その背中にふにょん、と柔らかい感触が……………。

「ゆっ、結姫！？」

「温かいですね……………」

あ、当たってる当たってる……………！ 何がと言わないけど、マシユマロの山が2つ……………！！

「……………今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いって……………」

「私、人に助けて頂いたの……………初めてなんです」

……………え……………？

「天下の咲之宮家……………カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄……………姉2人は才能があつたのか、ほとんど力を付けていきました」

まあ、俺はまだ咲之宮家がどれだけ凄いのか分からないけど……………それでも、相当凄いんだろうなあ、と曖昧には分かる。

「……………妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています……………それなのに私は……………アカデミアに入学しても、妹には全く勝……………」

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで」

「……………」

「私、捨てられたも同然なんですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用人と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻みに震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。

プレッシャー、もあるんだろう。

大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかには想像出来ないものなんでしょう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思っただんです。ああ、これも良いかな、って」

「は……？」

「このまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなあ、って……」

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だっただんです」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだったんです……！　まるで

……心の蟠わたかまりが溶けて行く感じがして……」

「ねえ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮って、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？ 俺はもう、お前の友達なんだからさ……気兼ねなんてしないで良いって」

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いし。な？」

上半身を起こして、まだ少しだけ湿っている結姫の頭を撫でる。
なるべく優しく、優しく。

「とう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事はしてやるよ。
友達……だもんな？」

「ふ……うええ……」

ちよつとクサかったかな、なんて思ったけど……どうやらこれで
良かったみたいだ。

俺の胸に抱き付きながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく
撫でてやりながら、俺は暫くそのまま居てやる。

窓からは、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「…………初めて、だったんです」（後書き）

小説って、難しいですね…………（汗）

……………やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねっ
↑

感想、評価等お待ちしております！！

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

「あ、おはようございます、燈夜さん！」

「ん……おはよう、結姫」

翌朝。

珍しく……というか初めて鳥の囀りさえずりで眼を覚ました俺がリビングに行く、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。

そっぴゃ、使用人方が居ない……違う部屋とかかね？

「朝食、出来てますよ」

「ありがとう。……ところで、君が作ったの？」

「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかったですし」

あ……気付いてたんだ。

なんて思ったけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作ったという豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろす。

「「頂きます」「」

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味しい！」

「はい。私のとは大違いですよねっ」

……結構ショックだったのか、お前？

「……今度教えて貰いましょう」

………頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は砕けて良いよ、とは言ったけれど……昔からこの口調だったからか、最早これが素なのだという。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、んゝ、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハードとマナに視線を送る。

「んじゃ、行くかな」

「え……もう行ってしまうんですか？」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、どこに行くか……聞いて良いですか？」

「え？ あゝ……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を掻いていた。んにゃろう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじゃないかなー」

この世界にや勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハードやマナも、正直今のところは役立たず、って感じだからなあ……。

……せめてもうちょっと準備して欲しかった、うん。

「な、ならっ……!」

「へ? 何?」

顔を輝かせて近付いてくる結姫。

えと……?

「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんか?」

——説明をしてもらうと。

今、結姫が通っている第壹デュエルアカデミアかしど櫛都校という場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。

後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というもの。

「いや、俺、金も持ってないし……学費とか寮費? とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ?」

「大丈夫です。第壹校は咲之宮家が設立しましたから、例えば私でも顔は利きますよ」

「……………」

え、何それ怖い。

なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。

全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしく、アカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。

成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無一文……うわ、情けねエ。

「えと、じゃあ……お願いします」

「はいっ！」

ホント、いつか恩返ししなきゃな……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑っている結姫に苦笑を浮かべたのだった。

——手続きとかは私がしておきますっ。私はとにかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまったら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらった、美味しい食事を貰っただけで充分なんだけどな……。

そんな事を言ったら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙っておいた。

——俺は只今、町を探検中であります。

ちゃんとここに帰って来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色んなカードショップを見て回りながら進んでいた。

「…………なあ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだった。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

…………閑話休題。

「…………もしかしてこの世界って、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「……………ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなあ…………。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。

どうするよ…………俺のブラマジデッキ、チューナー入ってるぞ？

アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え…………はあ。

しかも、俺は余りのカードなんて持つていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて…………不便だ。

「…………ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映つて、俺はふと立ち止まった。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートの子…………、柔らかい髪質っぽくて結構可愛い女の子…………

………？

「は、基！？ 幸仁……！？ って、コイツも……良く見たら慧じやねえか！」

な、なんでテレビに……？ しかも慧に至っては……女装？

………ほわあい？

そっかそっか、コイツラ芸能人になったのか。慧は……あれだ、需要を狙ってとか？

『この3人、実はお知り合いとの事で集まって頂きました！ 突如^{かしこ}榎都町に現れたこの3人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あゝ、成る程。そういうことが……ちなみに、言い忘れてたけど榎都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？ この世界に来たばかりのあいつ等は何も知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまって、一気に有名になった。それがこの結果、と。

——でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着ているのは昨日、結姫が着ていた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着ているのは青だっところだけ。

……慧や結姫の制服は赤のブレザーだ。

——んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『この3人は今、第壹デュエルアカデミア櫛都校にて、数少ない特待生枠として選出されています!』

マジか……アイツラ、第壹校に居るのか。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

顔が自然と綻ぶ。良かった……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……! 早く会いてえな!

「チツ、たりー……」

「そう言っな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突っ込み、元来の目付きの悪さがさらに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃんね？」

「チツ……わーってるよ」

最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやって来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。

「時間は空いちちゃったけど、皆集まれて良かったね」

「ああ、まあな」

「チームLEGENDS……“全員集合”か」

3人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。

「これからどうするの？」

「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃないの？」

そうだな、と幸仁も同意する。

彼らも燈夜と同じく、精霊によって選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因は分かっていない。

「けど、探すって言うても……どうやって？」

「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキストに待ってりゃそっちからくんじゃね？」

「果報は寝て待て、とも言っからな」

尤も、果報では無いのだが……それは3人とも分かっているのか、それに対して何かを言う事は無かった。

沈黙が続く。

「なあ……」

その沈黙を破ったのは、基だった。

「……………なんか物足りねーんだけど」

「うん。僕もそう思ってたところ」

「……………奇遇だな」

何かが、足りない。とても大事な“何か”が…………。

しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴…………！」

——暫くの後、^{のち}そう言って走ってきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガ―ゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よお！」

「……………また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だっつもの。じゃあな！」

手を上げて、基が去っていく。その姿を見届けた幸仁は、はあ、と深い溜め息を零した。

「変わらないね……………基」

「……………ああ……………俺も、この後父上との会談がある。ここで失礼する」

「あ、うん。じゃあね」

頷いて、幸仁も去っていく。

「やっぱり……なんか、違う」

ぼそつと呟いた慧の声は、喧騒に掻き消されていく。

——そして、あっと言う間に一週間が経過した。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」(後書き)

コメディ書こうとしたらシリアス書いてしまう……なんていう駄目作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いない(汗)

感想、評価等お待ちしております！

「――は？」

――第壱デュエルアカデミア櫛都校。

特待生枠、5人。今は慧たち3人しか居ないらしいが……それはともかく、かなり有名なアカデミアらしく、時折テレビや雑誌に載ることも多いらしい。

咲之宮家が設立し、早数十年。学費や寮費もそれなりに安く提供していて、且つ設備も良くプロデュエリストやアイドルデュエリストを幾人も出している功績から、今やこの世界で一、二を争うアカデミアだという。

そんな結姫の説明を受けて、俺ははー……としか言い返せなかった。

執事服に身を包めた格好良い男性に乘せて貰い、俺と結姫は第壱校へと向かう。

「そついや、第壱校って階級みたいのあるのか？」

「階級、ですか？」

アニメのGXだと、オシリスレッド、ラーイエロー、オベリスクブルーに分かれていたからなー。後半はともかくとして、前半のレッドの扱いは酷かった。

特にブルーと教官、クロノスの差別にはアニメながら腹を立てたものだ。

「ありますよ。第五位から第零位まで」

「……ごめん、説明お願い」

アニメとは違うんだな……世界が違うし、当たり前だけど。

「はい。一番下の階級が第五位でして、順に第零位まで上がっていきます。基本的にはデュエルモンスターの成績によって上下致しますが……家柄などでいきなり第一位、または第二位になることがあるので……」

浮かない顔でそう告げる結姫。確かに、そういうのはヤダな……。

「ちなみに、お前は何位なんだ？」

「私は第二位に属しています。学園長には第一位を薦められたんですけど、私は実力で上がりたかったので」

「へー。俺もそうしたいな」

コネとかで階級を上げる奴って、なんか性格悪く感じるんだよね……。

その点、俺は結姫みたいなやつは好きだ。俺みたいな奴に言われてもキモイだけだろうから言わないけど。

ちなみに、その階級によって寮とかも変わるらしい。制服は変わらず、男が青、女は赤らしい。俺も既に制服に着替えているけど、まだちょっと違和感がある。

ま……そのうち慣れるだろ。うん。

「あ……もうすぐ着きますよ」

虎島校長……悪いけど俺、その名前を聞いて少し笑ってしまった。だってアレだぜ？ アニメGXの校長の名前が鮫島だし……え、まさか狙った？ まさかここまで似てるとは思わないだろ、うん。と、初対面の人に失礼な事を考えながら俺はアカデミアの説明を受ける。

……もう結姫に教えて貰った事ばかりだけど。面倒ったらありやしないな。

「——ここまでが大まかな説明だ。分かったかい？」

「え？ あ、はい……ありがとうございます……」

「そうか、良かった。君は第五位からのスタートになるが……」

構いません——そう言おうとした時だった。

部屋の扉がノックされた。虎島校長がどうぞ、と許可を出すと扉が静かに開いた。

「失礼しやーす」

「……失礼します」

「失礼します」

3人の声。ダルそうに欠伸をしながら中に入ってくる男性が1人、物静かに入ってくる男性1人、そして赤い女生徒用の制服を着た人1人……。

「基！ 幸仁！ それに慧！！」

そう、その3人だった。

「あ？」

「よ、元気だったか！？ 良かった、この学校に皆が居てさ。実はちょっと不安だったんだよね……」

結姫が居てくれたとは言え、彼女は階級が違う上に性別も違う。例え同じ階級になれたとしても、男性寮と女性寮に分かれてしまうだろう。

そうになると、どちらにせよ結局は“独り”で頑張る事が多くなってしまう。

と、なると――。

俺はやっぱり、皆に再会できて良かったな、って思う。

そう、俺が安堵の息を漏らしている時だった。
女性用の制服を着た慧が、首を傾げる。

「……………君、誰？」

「――は？」

あれ、俺の聞き間違い……………か？ それとも人違いかな？

「えと、ごめん……………瀬野基に瀧川幸仁……………長谷部慧、だよな？」

「……………何故俺たちの名前を知っている？」

「いや、だって……………え？ じゃあ、その……………地球から来たんじゃない――」

いきなりだった。

俺の言葉を遮るように、基が俺の胸倉を掴む。そして……………まるで

仇でも見るかのような鋭い視線を俺にぶつけた。

昔の基を思い出す、冷たく悲しげな視線……！

「テメエ……なんでそれを知ってやがんだ、あア!？」

……やっぱり、基たちは地球……日本から来たんだ。俺と同じで。

「……冗談、だよな？ ほら、基ってさ……幼馴染居たろ？ 中学ん時にやんちゃしてる時も、ずっと傍に居てくれた……幸仁は大学生の彼女が居て、すっげー大事にしてる……慧、お前は男だろ……？ 高校に入っすぐ、電車の中で痴漢されてさ……泣いてただろ?。」

まさか、という不安が胸中を支配する。基は俺の胸倉から手を離して、鋭く睨み付けながら口を開く。

聴くな。

そう制止が脳内で響くも、俺の耳朵は基が発する震動をキャッチする。

低い……それこそ、針のように俺の心臓を抉るものに近い言葉の棘……。

「……テメエ、何モンだ?。」

——棘が、心臓を突き刺す。

「僕の性別も知ってるなんて……それに、なんでそこまで詳しいの?。」

「それは……」

「怪しいな」

怪しい……そう呟いた声に反応して、基がはぁん、と口元を歪ませる。

「テメエ、アレじゃねーか？ 精霊どもが言ってた世界の歪みってのを引き起こす存在ってのは」

「はぁ！？」

「成る程な。一理ある」

ねえよっ！

そう反論しようとしたら、後ろですつと傍観していたらしい虎島校長の制止によって止められた。

……空気読め。

「どうやら、君たちには何かしらの事情があるみたいだが……悪いがこれでお開きにして貰いたい。もう少しで式だ」

「……チッ」

確かに、結構な時間が経っている。

第壱校では、教室が1つしかない。そこに全ての階級の生徒が集まり、様々な式や講義を受ける事になる。

尤も……アカデミアが行うデュエルトーナメントとかを行う場合はデュエル場で開会式が行われるらしいんだけど。

「……では、1つ提案が御座います、校長」

「何かね、瀧川君」

相変わらずの長い髪。幸仁は一步前に出た。

「本日の新期式にて、1つの余興としてはどうでしょう？」

「余興、と？」

「はい。我々、特待生の誰か1人と……本日からのアカデミアで過ごすという彼のデュエルです。聞けば、咲之宮家のご令嬢のお知り合いらしいですし……良い見世物にはなるかと思われます」

ちえ……相変わらず、ぺらぺらと言葉が続くな、こいつ。

「成る程……それは良いかもしれないな」

「……僕がやるよ。僕にやらせて欲しい」

そう言って手を上げたのは、慧だった。

「……分かりました。それでは、それでやって貰いましょう。それで宜しいかな、一ノ瀬君」

「——ああ」

相手は慧、か。

俺という存在が忘れられていた事に心が揺れながら、俺は小さな声で返事をした。

基、幸仁……慧でさえも、俺のことを敵対視する視線に耐え切れず、俺はそそくさと部屋を出たのだった。

新期式……新たな季節と学期の境目を告げるその式を目前にと迫っていた俺は、ギスギスした雰囲気のまま慧たちに案内され、第五位の寮に到着した。

オシリスレッドの寮よりも小さな建物は、風呂もトイレも共同らしい。その上ワンルームで、物も殆ど置けない。

……今にもゴキブリとか出てきそうだな。

敷かれていた布団の上には2着の制服と黒いデュエルディスク。それと連絡手段のDP。決してデュエルポイントではなく、デュエリストフォンの略である。しかし、生徒全員にDPが支給されるなんて、リッチだなあ……なんて思ったり。

俺は元々着ていた私服を脱ぎだす。すると、何故か後ろに残ったままだった慧が顔を背けた。

(……相変わらず、だな)

日本に居た時も、俺が着替える時は極力視線を逸らしていたのを思い出す。しかも顔を赤くして。だからマン研のやつらに……略。

制服に身を包んだ俺は、携帯大のDPをポケットにしまい、黒いデュエルディスクを左腕に嵌める。カチッ、という音を確認すると、制服のベルトにデッキの入ったケースを差し込んだ。

——良し。

「……んで、テメエは何モンなんだよ？」

待つてくれていたのか、俺の準備が終わると同時に基が口を開く。

「……………さあな」

「ああっ！？ 調子乗ってツとぶち殺すぞッ！」

まったく、相変わらず柄悪いな、基は。

俺はそんな姿に溜め息を零しそうになりながら、制服のポケットに両手をつ込む。

「俺は一ノ瀬燈夜。お前らと同じで地球からやって来たんだよ」

「一ノ瀬エ？ んな奴、聞いたことねーな……………なんで俺たちの事知ってんだよ」

——やっぱり、記憶が無いのか。しかも俺のことだけ。

うは……………めげそう。

こんな事態、マハードやマナは知ってたのか？ 知ってたとしたら、教えてくれても良かったのにな……………。

「なんで、って言われてもな……………」

……………言っても良いのか？ 言ったら思い出すかもしれないし……………迷う。

と、脳内で考えていると、頭に直接響くような声が聞こえる。マハードの声だ。

『言わない方が良いかと思われます。彼らは今、燈夜殿の事で頭が混乱しています。その上、貴方がご学友だと言えば、さらに頭を痛ませる原因になりかねません』

ふむ……………一理あるな。

俺の頭が痛くなりそうだけど……………まっ、コイツラの為だ。

「お前ら、結構有名だったぜ？ 色んな大会で上位に君臨してるしな。遊戯王チームLEGENDsの名前って、外国にも名前を轟かせてたし」

これは嘘じゃない。パソコンで検索を掛けたら、かなりの数が出てきたんだからビックリだ。

「成る程な……しかし、何故基の幼馴染の事や……俺の恋人の事も知っていた？」

げ、そのまま流してくれよ……面倒だな、ったく。

「いや、俺ってLEGENDsの大ファンだったんだよね。言わばストーリーカー？ お前らが住んでる町まで行って調べちまったんだよ。ゴメンっ！」

軽蔑するような慧の視線が俺に突き刺さる。痛い、痛いって。それこそ汚物でも見るような眼差しだ。特に基の殺気なんてスゴイ。ただ、全く変わらない幸仁の視線が実は一番怖かったりするんだよね……はは。

「……そうか。では、俺たちは先に教室へ向かっている。じゃあな」「ついて来んじゃねーぞ、ストーリーカー」

「……………それじゃあ」

冷たい瞳のまま、3人は部屋を出て行く。結局、慧が女生徒の制服を着ている理由を聞けなかった。

『マスター……』

「……わりい、ちょっと1人にして」

耳鳴りがした。

「——は？」（後書き）

毎回毎回、話のタイトルで頭を悩ませます……。

そういえば小説書いてる方は、曲聴きながら書いてます？

私はWALKMANで大音量っていうwww

ただ、友達は集中出来ない（歌っちゃう）から聴かないみたいです。

皆さんはどちらですか？？

感想、評価等お待ちしておりますよ！

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」

……新期式。最早俺にとっては入学式と言っても良いソレを受けながら、俺は内心溜め息を零しながら思う。

……………どこの世界も、校長の話って長いんだな。

かれこれ30分は経っているんじゃないかと思うほどに長い口上が並べられている。良くもまあ原稿も無しにそこまで話せるもんだ。場所はこのアカデミア唯一の教室。

階級ごとに分けられた席順だが、非常に面白い事に、第五位は俺しか居ないらしい。周りは空気だ。三沢的な意味ではなく、本当に。しかも一番前の列だから、寝る事も出来ない。

「……………たりー」

つい小声で呟いてしまうほどには、俺の気は削がれていた。

正直これっぽっちも興味が湧かない虎島校長の話は無視して、俺は教室を視線だけで巡らす。

壇上に居る校長と教卓。その背後には巨大なスクリーンが天井から吊られている。妙に近未来的な学校だ。教科書やノートなんて物も無く、席には備え付けのノートパソコンが置いてあるんだから。

ちなみに、このノーパソはDPを掲げる事によって識別番号を認知し、その人個人の情報が表示される。

……DPを落としたら大変だな。

んで、その校長から少し離れた場所に居る優男風の男性。若いけれど、あれで教頭先生らしい。地球の時のイメージが大きいから、

凄く違和感。

その教頭先生の隣に特待生の3人——慧、基、幸仁が並んで立っていた。

さらに離れて、生徒会長や生徒会副会長など。

一段上がって、後ろの列には誰も居ない。本来ならその列も第五位の生徒が使うはずだからだ。

そのまた一段上がると、第四位の生徒。そこから2段上がって、一番数が多いという第三位の人たち。

（以外と女性、多いんだな……）

さらに上……ここからは流石に確認すると、校長たちにバレル。

けれどその辺りは第二位のはずだから、結姫はその列のどこかに居るはずだ。

……後で挨拶しないとな。

「——では、私の話はこれで終わりにする」

ふう……やつと終わったか。

「虎島校長、ありがとうございました。それでは……ここで、催し物を用意致しました」

——催し物？　ってなんだ？

——なんかのイベント……？

——今までこんなのがあったか？

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「まずは本日より第壹デュエルアカデミア櫛都校に編入した人を紹介します。どうぞ、前へ」

「あ、はい」

うわ……結構緊張するな。CSの表彰式に上がった時よりも緊張する。

まだデュエル動画撮ってた方が良いな、こりゃ。

「えと……一ノ瀬燈夜、です。第五位からのスタートになりますが、皆さんに追いつけるように頑張りたいと思います。宜しく願います」

よし、結構良い印象与えたんじゃないか……？

なんて頭を下げながら思ったけど、拍手が疎らだ。それこそ、多くて5人くらい……？

顔を上げる。

……本当にすくねえ。

結姫は大きく拍手してくれている。けれど、それ以外俺に拍手で出迎えてくれているのは2、3人くらいだ。

なんか……もしかして、皆暗い？ 人の事言えないかもだけどさ。

「今回の催しは、彼と特待生の1人、長谷部慧さんとデュエルしてもらう事です」

生徒会長（らしき人）がそついうと、慧が一步前に入る。

最近久しく見ていなかった真剣な眼差しが俺に突き刺さる。と同時に、何故か教室内に居る男子たちに殺気が出てきた気がする。

「……どうして？」

……もしかして、アレか？ 慧って人気者？

「それでは、デュエルスタンバイをお願いします」
「あ、はい」

おおっ！ 教卓が床下に沈んでく！
面白いなー。

なんて感想を持ちながら、俺はある程度距離を置いて横側に付いているボタンを押してディスクを展開する。
黒いスリーブに入ったブラマジデッキをディスクにセットすると、勝手にシャッフルされた。

5枚引く。充電切れ……もとい、ターンランプ？ が光った。

「始めよう、一ノ瀬さん——デュエル！」
「で、デュエル！」

は、恥ずい……。。

——彼を一目見た時、僕は妙な懐かしさを感じた。

漆黒の髪に黒耀のような真っ黒い瞳。正直、容姿は良くも悪くも無く、平凡。咲之宮家のご令嬢と知り合い、という幸仁の言葉も少し……信じ難い。

けれど彼は、“何か”ある。僕はそう直感していた。

「えと、俺の先攻で良いんだよね……ドロー！」

彼は僕たちと同じ、地球の日本から来たらしい。もしも同時期にこの世界へ飛ばされたのだとしたら、環境から見て、代行天使や暗黒界とかの可能性が高い。

用心しないと。

「——うし。俺はまず、《魔導戦士ブレイカー》を召喚！ このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを1つ置く。それに伴って、攻撃力もアップ！」

《魔導戦士ブレイカー》 魔力カウンター0 ↓ 1 ATK 1600
↓ 1900 .

ブレイカー……かつて禁止カードにもなった、汎用性のある閻魔性、魔法使い族モンスター。

確か昔の選考会で、採用率が1位だったんだよね。

けれど色んなデッキに入るとは言え、これで代行天使や暗黒界の可能性は下がった……かな。

「ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

……まだ基や幸仁には敵わないけれど、これでも第一位の特待生。それに、

「ストーカーさんには、負けられない……！ 僕は《召喚僧サモンプリースト》を召喚！ このカードは召喚した時、守備表示になる！ そして、手札の《古のルール》を捨てて、デッキから《E・HERO プリズマー》を特殊召喚！」

今、手札に上級モンスターやそのサーチカードはない。

僕はスカートのポケットの中に入っている一枚のカードに手を伸ばす。

「そして、プリズマーの効果を発動！ エクストラデッキの《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキより、その素材の1枚……《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！」

——このカード、欲しいのか？

——ま、俺は使う気ねーし……やるよ。

——コレを機に、お前も遊戯王始めないか？

ちくつ、と……微かな痛みが僕の頭を襲う。

「……僕は、LV4の《召喚僧サモンプリースト》と《E・HERO プリズマー》をオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……！ エクシーズ召喚！ 《ダイガスタ・エメラル》ッ！」

「うあ……やっぱりか」

特殊召喚されるエメラルの周りには、緑色の球体が2つ飛び回っていた。

「――念の為、知らない人が居る可能性もあるので説明しておきます。彼女……長谷部慧さんや瀬野基君、瀧川幸仁君はかの伝説のカード、《E・HERO ネオス》、《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンレッドアイズ・ブラック・ドラゴン、《真紅眼の黒竜》ラゴンを使用しています。そして且つ、謎のシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行えるのです！」

歓声が沸き起こる。恥ずかしいなあ、もう……。

一ノ瀬さんも流石に苦笑しているようだ。

……気を取り直して。

「エメラルの効果を発動！ このカードのエクシーズ素材を取り除き、僕は墓地に存在する効果モンスター以外のモンスターを1体、特殊召喚する！ 来て！ 《E・HERO ネオス》！！」

出た……このデッキのエース！

——うん。僕もやるよ……——君！

一瞬、だけど。

ネオスが僕の方を向いて、悲しげに眼を細めた気がした……見間違い、だよな。

「ばっ、バトル！ ネオスで、《魔導戦士ブレイカー》を攻撃！」
「うわっ！？」

軽い衝撃が一ノ瀬さんを襲う。

一ノ瀬燈夜LP4000↓3400・

「続いて、《ダイガスタ・エメラル》でダイレクトアタック！」
「く、うう……」

一ノ瀬燈夜LP3400↓1600・

「僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ」

「ふう……つたく、強くなったな……お前」

「え……？」

何かを懐かしむように、僕を見つめてくる。

「最初は苛められっ子で、俺の後ろを付いて回るだけだったお前が……なんか、すげー懐かしい」

「あ、え……？」

確かに、僕は苛められていた。女っぱいから、っていう理由だけで。

そんな僕を見かねたかのように、誰かが助けてくれて……。

あれ。

僕を助けてくれたのは、基？ 幸仁？

誰——？

「……行くぜ。俺のターン、ドローッ！」

勢い良くカードをドローする一ノ瀬さん。

「俺は手札から、《ガガガマジシャン》を召喚！」

ガガガマジシャン……？

「ディメンション・マジック速攻魔法！俺の場に居る《ガガガマジシャン》をリリースし、来い！《ブラック・マジシャン・ガール》……！」

『れっつごー！』

「なっ……まさか、彼も伝説のカードを！？一体どうなってるんだあーっ！？」

生徒会長だけでなく、会場に居る殆どの人が驚いている。それは、僕も例外じゃない。

「《ディメンション・マジック》の効果により、《ダイガスタ・エメラル》を破壊する！」

「え、エメラルを破壊？」

ネオスじゃないんだ……。

ブラマジガールが放った魔法がエメラルに直撃して、見事に粉砕する。残ったエクシーズ素材も一緒に墓地へ行った。

「魔法カード、《賢者の宝石》！ブラマジガールが俺の場に居る時、師匠である《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！出て来い、マハード！」

『仰せのままに、マスター』

伝説のカード、2枚目。

魔術師の師弟が並び、会場が静まり返る。

「魔法カード、《マジシャンズ・クロス》！ 俺の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、1体を選択！ 他の魔法使いは攻撃できない代わりに、そのモンスターの攻撃力を3000まで引き上げる！ 対象はブラマジガール！」

『パワーアップっ！』

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK2000 ↓ 3000 .

「これが勝利の鍵だ…… 《死者蘇生》！ 俺の墓地に居る《ガガガマジシャン》を蘇生！ そして、効果を発動！ 1ターンに1度、1から8のレベルを宣言し、そのレベルになる！ 俺はLV7を宣言！」

《ガガガマジシャン》 LV4 ↓ LV7 .

一ノ瀬さんは大きく深呼吸した。

やっぱり、彼もエクシーズ召喚を……！

「なあ、慧」

「え……」

「俺、本当はこんな事、やりたくなかったんだぜ？ 目立ちたくなかったしさ……俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ。けどさ、」

《ブラック・マジシャン》とLV7の《ガガガマジシャン》が、小さな光になっていく。

「お前のネオスが、凄く辛そうだから……感謝しろよな？ 俺はLV7同士の《ブラック・マジシャン》と《ガガマジシャン》でエクシーズ！ 来い！ 《No.11 ビッグ・アイ》！」
「っ……！」

よりもよって、ソレ……！？

「で、伝説のカードだけではなく、エクシーズ召喚さえも行って見せた編入生！ 一体彼は何者……！？」

黒い光となったブラマジと《ガガマジシャン》。その中の1つが、ビッグ・アイに吸収されていく。

「ビッグ・アイの効果を発動！ エクシーズ素材を1つ取り除いて、相手モンスター1体を選択！ このターン、ビッグ・アイは攻撃できないけど……永続的に、そのモンスターのコントロールを得る！ こっちに来い、ネオス！」

ネオスが、僕のフィールドから離れていく。
遠くへ行ってしまふ。

大切なネオスが……。

「あ……」

——お前のことは、ボクが守ってやるって。だから泣くな、な？

——ボクは一ノ瀬とうや！ これからは、お前の友達だからなっ！

「とう、や……」

「《マジシャンズ・クロス》の効果は、“他の魔法使い”が攻撃出来ないだけだ。だからネオスは攻撃出来るぜ。元々、ビッグ・アイは効果を使ったターン、攻撃出来ないしな。あ、ちなみに取り除いたエクシース素材はブラマジだから、ブラマジガールの攻撃力も上がってるぜ？」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK 3000 ↓ 3300 .

「バトルフェイズ！ 《ブラック・マジシャン・ガール》で、慧にダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「あ………！」

手が、動かない。

赤い火の玉が、僕を襲った。

長谷部慧 LP 4000 ↓ 700 .

「ネオス……行っけえ！ ——ラス・オブ・ネオス……！」

『はっ………！！』

ネオスのチョップが、僕に直撃して………。

長谷部慧 LP 700 ↓ 0 .

教室内は静寂に包まれていた。

第五位の編入生に、特待生が負けたんだ。仕方ないっちゃ仕方ないけどな。

俺はデッキをケースに仕舞って、俺は仕方ないな、と言った感じで溜め息を零した。

「……………無意識に、手加減をしちまうのも……………お前の悪い癖だぜ、慧」

「手加減、とは……………」

生徒会長がマイクを通して、俺の言葉に反応する。

俺は肩を竦めて、元の自分の席に戻ろうと背を向けた。

「大方、その伏せカード……………攻撃反応型のトラップだろ。ブラマジ
ガールが攻撃しようとしたら、視線がそのカードに向かったからな」

そもそも、実はチームLEGENDsで、俺は最弱の部類なんだ。
あれを防がれてたら手札は0枚だったし、危なかっただろうな、う
ん。

……………もっとデッキ、改良しようっと……………。

「確かに……………《聖なるバリア・ミラーフォース》」

……………よりもよってそれですか、そうですか。

慧のデュエルディスクから確認したらしいカード。俺は小さく溜め息を零した。

と同時に、教室内の空気が和らぐ。やっぱり手加減してたんだ、とか特待生の人に勝てるわけ無いよな、とか……後、慧タンはあはあ、とか。

最後の奴、潰すか。“アレ”を。

その後。

慧が俺をずっと見続けていた以外は、滞りも無く新期式は終わりを告げた。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」(後書き)

タイトル、タイトルが……ッ！

タイトルは後から考えるタイプなので、良いタイトルを考える人は尊敬します(笑)

「ああ、可愛いと思うよ」

第一位、特待生寮の一室。

天蓋付きのベッドで横になりながら、長谷部慧は目を閉じていた。

——……………君、誰？

「なんで……………」

なんで、忘れちゃっていたんだろう。

新期式が終わり、数十分程度しか経っていない。デュエルディスクは外したとは言え、服装はまだ赤い制服のままだ。

「……………燈夜……………」

彼は、忘れないで居てくれた。けれど、自分たちを混乱させない為にと嘘を吐いたんだろう。

彼ならそうする。

彼は優しいから。

しかも、無自覚で……………天然なんだ。

「それに惹かれて、僕たちは燈夜の傍に居たんだよ……………」

その言葉に答えてくれる人は、居ない。

未だに基と幸仁は忘れたまま。

「特徴が無いからリーダー……………か。基は照れて、そんな事言っただけ……………本当は違うよ？」

段々と涙声になっていく。

「僕も……基も、幸仁も……君に助けられたんだから。君のおかげで、今の僕たちが居るんだから………なのに、なんで」

——なんで、忘れちゃったの？

自分に問い掛けて……答えは出てこない。

「全部……全部、思い出した。僕は——」

声にならない声で、呟く。

慧が燈夜と出会ったのは、小学生の時だった。

「お前、本当に男かー？」

「おい、服脱いで見ろよ！」

「もう、止めなよー。ケイちゃんが可哀相でしょー？」

小学校の教室。複数の子供の笑い声が木霊^{こだま}して、幼い慧の瞳に涙が浮かんだ。

喋り方も男らしくなく、仕草も女の子みたく。顔立ちが可愛らしく、身体付きが華奢で身長が低かった。

その上、明るい茶髪に綺麗なブラウンの瞳は、他の男子よりも随

分違つて見えた。

小さな子供達の間で、目を付けられるのも頷ける。
無理矢理にも脱がせる気なのか、1人の男子の手が伸びた時――。

「まったしょうもねーことしてんのか、お前は？」

慧を面白がつて見ている男子や女子たちと慧の間に割って入ってきた1人の男子。

それが、“一ノ瀬燈夜”だった。

「なんだよ、一ノ瀬。隣のクラスなんだから関係無いだろっ！」

「コイツはボクと同じ人間！ ほら、関係あるだろ？」

「は、はあ？」

何言つてんだコイツ、みたいな眼で燈夜を見付けるリーダーっぽい男子。

しかし、燈夜の言っている事自体、間違つて“は”いない。一応。

「つかお前ら、コイツが嫌がつてんのわかんねー？ だとしたら馬鹿だな、馬鹿！」

「はあっ！？ そ、それくらい分かつてるっつーの！ なっ！？」

その男子の問いに頷く後ろの子供達。流石子供、燈夜の簡単な口車に乗せられてしまった。

「分かつてるならなんで続けるんだ？」

「そ、それは……」

「クラスメイトが嫌がつてる事をやるなんてなー。あっ、もしかして馬鹿じゃなくて、大馬鹿さん？ 偉い子はそんな事しないんじゃない？」

ない？」

ぐっ、と言葉に詰まる男子。

「け、けどよ……ソイツ、男っぽくねーじゃんか。なんか、オレたちと違うっつーか……」

チク、と慧の胸が痛む。

燈夜は背後に居る慧をじろじろと凝視して、一言呟いた。

「んー？ 何が違うんだ？」

「ひゃ、ひゃひ？」

慧の頬を摘み、縦へ横へと伸ばす。どんどん変わっていく慧の顔に、なんとなく面白くなった燈夜はぶっ、と吹いてしまった。

手を離すと、頬が赤くなってしまっている。

涙目になって頬を押さえる慧にゴメン、と一言謝って燈夜は再び男子達に向かい合う。

「ボクたちとなんら変わらなくてね？」

「え……」

「まあ、確かに髪の色は明るいけどさ。んなこと言ったらボクとお前じゃ、ボクの方が背は低いし髪は黒い。そっちの子はちよつと太ってるし、その子は眼鏡掛けてるじゃん」

人はそれぞれ、千差万別、十人十色。それを幼い頃から……それ
も天然で分かっているからこそ、本気で不思議だった。

何が違うのだろう、と。

自分も彼も、他の人も、結局は同じ“人間”なのに。

「……………」

燈夜のその言葉に、男子達は何も言えなくなっていた。

「ほらっ！ 人に嫌がったことをしちゃった時は、まずゴメンナサイって言わなきゃね」

燈夜が退いて、男子の背を押す。

「そ、その……さ……………」

「ごめん、ゴメン、ご免……次々と発せられる謝罪の言葉。慧に詰め寄っていた全員が、軽く俯きながら口を開いていた。

「もう良いよ！ こ、これからは普通に友達になろう？ ね？」
「——あ、ああ！」

慧が燈夜の方へ視線を向ける。

けれど、その場に燈夜の姿は無く——。

「ふわぁ」

幼き一ノ瀬燈夜少年は下校途中、大きな欠伸を零した。

眠そうに眼を擦る。

無駄に重いランドセルを背負い直し、帰宅路を歩く。

「……………っ！」

「……………ん？」

声、だろうか。

小さな物音が後ろの方から聞こえてきた。

「……………ノ瀬君！」

やっぱり声だった。

後ろを振り向くと、オレンジ色のランドセルを背負った長谷部慧がこちらに向かって走ってきていた。

燈夜の目の前まで来ると、はぁ、はぁと息を整える。最後に大きく深呼吸して、慧は勢い良く頭を下げた。

「ありがとう、一ノ瀬君！」

「は……………？」

意味が分からない、と言った風に首を傾げる燈夜。

「えと……………何が？」

「今日……………助けて、くれ。その上友達も出来たし……………」

「あゝ、その事か。アイツラとは仲良くやってる？」

「う、うん。さっきまで一緒に居たし……………」

「そっか。んじゃ、ボクのおかげじゃないな」

今度は慧が首を傾げる番だった。

「確かにきつかけを作ったのはボクだけださ。結局その後、その子と仲良くなれるかは自分次第でしょ？　もしボクが君だったら絶対仲良くなれなかったもん」

それは胸を張って言えることだろうか……しかし、燈夜は絶対！
と言つて頷いていた。

その姿に、慧がぷつ、と笑ってしまう。
そんな慧に、燈夜もははっ、と笑みを浮かべる。

「それにさ。お前、良く男っぽくないとかなんとか言われてたじゃん？　けどそれって、可愛いって言われてるんじゃないの？」

「可愛い……？」

「そ。男だろうが女だろうが、可愛いは褒め言葉だと思うよ。自信持てば良いじゃん」

ふと。

本当にふと、気になった事がある。

「その……一ノ瀬君も……僕の事、可愛いって思ったり………する？」

「ああ、可愛いと思うよ」

ドクン、と……心臓が高鳴る音がした。

小学3年生。

一ノ瀬燈夜と、長谷部慧が初めて出会った時の事。

「ああ、可愛いと思うよ」（後書き）

今回は少し短めでした。

うーん、文字数は基本的に4000文字前後を目指しているんですけど、読者にとってはどれくらいが良いんでしょう……？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(前書き)

タイトル？

狙いましたが何かwww？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」

「凄いですね！ 特待生の方に勝ってしまうなんて」

「ま、手加減されてたみたいだけだな」

「それでも凄いと思いますっ。ただでさえ第五位の人の特待生の人とデュエルする事は珍しいのに……」

あ、やっぱりそうなんだ。

とすると、アレかな？ 第五位や第四位の人って、“ドロップアウトボクイ”みたいな感じに言われんのかな？

うは……憂鬱。

新期式の片付けは第三位から第五位の人が行うらしく、丁度その片付けが終わったところだ。

手伝いたいと言ったが断られた結姫は、どうやらずっと待っていてくれたらしく……これがリア充って奴か！

「ここが購買になります。購買ではパンやジュースなどは勿論、様々なパックが置かれています」

「へっ」

ソレは良いんだけど……金がね。

いつか結姫にも借り、返さないと行けないし……この購買辺りでアルバイト出来ないかな？

「ん？ へえ、パック以外にもカード、売ってるんだな」

一種のカードショップだ。ガラスケースの中に幾枚かのカードがあるし、ばら売りされてるカードも多々だ。

「ちょっと見てって良いか？」

「ええ、勿論」

さんきゅ、と言ってガラスケースの中を見ていく。流石に日版ばかりで、米版や韓版は無い。

「……そういや、今俺が喋ったり読んだりしてるの、日本語だよな？　けどここは地球じゃないし……お金の単位も円だし……うーん？」

まあ、良いか。

「えと……《聖なるバリア・ミラーフォース》……に、2万！？」

「……？　何を驚いているんですか？」

「え？　えと、え？　いや、な、なんでも……」

た、たけえ……俺の予想以上にたけえ……。

「《激流葬》……4万……《奈落の落とし穴》……1万2000円

……はは、んなアホな」

冗談は効果だけにしておけてんだ！

「なあ……この購買って、カード売ること出来るか？」

「はい、出来ますけど……」

「……はっ！　しまった、ブラマジデッキ以外のカードは“向こう”じゃん……。」

『燈夜殿。地球に置いたままのカードは全て持ってくる事が可能で

すが――』

「宜しく願いしますマハード様」

「な、何してるんですか……？」

はっ……マハードやマナ、結姫たちには見えないんだっ……。
端から見ると、何も無いところに突然頭を下げた変人の絵が……！

ははは。周りの視線が痛いぜ……チクショ！。

「……っ、次行こうぜ？」

「え？ あ、はい……」

止める……そんな眼で俺を見るな！ツ！

その後、校内を案内されている間……結姫の視線が少し、痛かったです。

『マスターって、結構お馬鹿さんだよなー』

「本当の事を言うのは止めようか、マナ。傷付くから」

地球に置いて来てしまったカードを持って来て貰った。
それで、一言言つと。

「部屋、狭いッス」

ただでさえ狭いののに、俺のカードが散乱してもうグチャグチャだ。取り敢えず布団が敷かれているところだけは確保。これで俺は眠れる。誰か来たとしても、後1人くらいなら座れるスペースもある。よし。

後は、このカードたちを残す分と売る分に分けるだけだ。

「面倒だけど……やるしかねーよな」

なるべく早く結姫の負担を無くさない。
それに、

（何か作業してれば……慧たちの事、考えずに済むよな）

まず、使わない分のカードを集めよう。

うーん……本当ならブラマジデッキを使いたいなーって思ってるんだけど、なんか伝説のカードらしいし……他のデッキも使おうかな？

あ、けどシンクロやエクシーズは自重しないと……くう、ツライ。

「……先に、使用するデッキ作っちゃうか。あゝ、今日は徹夜かゝ」

頑張っつてっ！ というマナの声援が横から。

うん。ボクはその声だけで頑張れるよ！ きつと。

なんて自分に喝を入れていたら、ちよつとボロい扉がノックされた。

こんな時間に誰だ……？ もう夜の8時だぞ？

「はい。ちょっと待って……あつ、《ゴキボール》踏んだ。ゴメンっ！」

ふう……犠牲は《ゴキボール》だけだったか……お前のことは忘れない……決して。

ガチャ、と意外と良い音と同時に扉を開く。そこには、妙に暗い表情のした……、

「慧……じゃない、長谷部……さん？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「燈夜……」

……？

つか、第一位の特待生がこんなところに来て良いのか？ 多分だけど、この学校……もとい、アカデミアも前半のアニメGX同様差別が激しいし、来ない方が……。

なんて思っていると、突然慧がばっ！ と頭を下げる。

「ゴメン！」

「へ……？」

わつつ……？

「全部……思い出したんだ。一ノ瀬燈夜……18歳、高校2年生……留年しちゃったから、僕や基とは学年が違うんだよね……」

「え……思い出したのか、俺の事？」

「うん。チームLEGENDsのリーダーは、僕の大切な人だよ」

そっか……そっか……っ！

俺は喜びの余り、慧に抱き付いてしまった。

「と、燈夜……っ!？」

「良かった……俺、なんかすっげー寂しくてさ……他人の空似だったらどれだけ良かったかって……何度も、何度も……!」

「燈夜……」

それ程、俺は弱い人間だった、ということだろう。

1人じゃ何も出来ない。家族、友達……傍に誰かが居ないと、俺は孤独に耐え切れず壊れてしまう。

マナやマハード、結姫が居たから良かったものの……1日でコレだ。コレが数日、数週間、数ヶ月とあつたら……。

「ゴメンね……燈夜」

「——……ああ、ありがとう、慧。落ち着いた」

数分、だろうか。

俺は暫く慧に抱き付いたままだった。

「ここじゃ何だし、中入るか？ つつても、スゲー散らかってるけどな」

「え……えと、良いの……?」

「何遠慮してんだ？ ほら、入れよ」

……相変わらずの散乱で。

なんとかカードとカードの間を通って、ベッドの位置まで移動する。

ふう、と息を吐きながら腰を下ろし、カードを纏め始める。

「マナ、茶頼んで良いかー?」

『んー』

「えと……燈夜、マナって誰？」

ああ、そつか。慧はアニメや漫画見て無いから、ブラマジガールって言わないと分かんないのか。

……いや、見ても分からないかな？

「マナー。実体化出来るか？」

『それでもお師匠様の弟子だよ？ そんなの簡単、簡単っ！』

個室に厨房は無い。だから、一度部屋を出て廊下の隅にある厨房まで行かないとお茶を入れることは出来ない。

だから、部屋を出て行くこととしていたマナがふっ……、と実体化する。未だに宙は浮いたままだけど、透き通っていた身体が色を持った。

「わっ！？ ぶ、ブラマジガール！？ なんてっ！？」

「へ……？ いや、俺の精霊だし。ブラマジも居るぞ？ お前もネオスが精霊だろ？」

「せ、精霊って……知らないよ」

え……。俺はてつきり、慧もネオスっていう精霊が居て、傍に居るんだと思ったからマナを実体化させたんだけど……。

「マナたちに世界の歪みみたいの、聞かされたんじゃないのか？」

「う、ううん。僕や基、幸仁が眼を覚ました時には世界の歪みに関しての知識が頭に入ってた……」

えゝ……んじゃ、聞かされたのは俺だけって事か？
マナに視線を送ると、私は知らない、と首を傾げられたし。どうやらその理由は分らないらしい。

「……まあ、良いか。それより、お茶お願い」

『はい』

情報が少ない今、考えても仕方ないしな。

「ところで、燈夜は何してるの？」

「ん？ 幾つか俺が使いそうなデッキを作って、残りは購買辺りに売っちゃおうかなって」

「売るの？」

「ああ。実はさ、ここの学費や寮費って、結姫……咲之宮の人が大目に見てくれてるんだよな」

「そっか……確かに、この世界に来た時貰ったお金だけじゃ足りないかもね」

「え？」

「え？」

お金を……貰った？

「誰に？」

「えと……僕たちをこの世界に呼んだっていう人、だけど」

……。

『お茶、お待ちどう——』

「なんじゃそりや嗚呼ああああアあああああああ！！！！」

『ひうつ！？』

ンだよソレ……不公平だ、不公平すぎる！

アレか？ 慧も基も幸仁も、皆顔立ちが整ってるからあげました
ってか！？ 平凡でスミマセンね、チクショウっ！

「……え、と……もしかして………」

「貰ってませんが、ナニカ？」

「……いいえ、何でも御座いません」

くそ……やってられねー。何が世界を救って欲しいだ、呼んだのはマハードじゃなかったのか、ああ？
黒幕って奴か……せめて顔出せや！

『ま、マスタ……？』

「今の俺に近付くと、犯されっぞ」

『それは全然構わないんだけど』

「いや、構えよっ！？」

精霊といえど、お前は女の子だろ！？

「はあ……まあ、良いや。ところで慧」

「え？ 僕を……犯すの？」

「犯さないから！ 頬を赤く染めるなっ！ 聞きたい事があるだけ

だつて！」

「まったく、ドイツもコイツも……。」

「お前、なんで女子の制服着てるんだ？」

「あ、コレ？ コレは、その……。」

「……？」

顔を俯いて、慧は言葉に詰まっている。そんなに言い辛い事なのか……？」

「言いたくないなら別に——」

「ううん。燈夜には、聴いて欲しいかな……。」

「…………。」

デッキを作っていた手を止めて、俺は真っ直ぐに慧を見つめる。スカートの裾を掴んで、何度か深呼吸している。勇気を振り絞っているんだ。その姿も忘れないようにと、俺は視線を逸らさない。やがて、慧の口が開く。

「燈夜は……っ。性同一性障害って、知ってる？」

「……性同一性障害？ それってアレだろ？ 身体の性別と心の性別が違うつて言う…………。」

「何度か、俺が書いた小説のネタにしているから調べた覚えがある。ん……？」

「この会話の流れでその病名を出したって事は…………。」

「……燈夜の思ってる通りだよ。僕はね、生まれ付きの性同一性障害なんだ」

慧は、自分のさらさらな髪を撫でる。ショートの場合は、慧の中世
的な顔立ちと相まって凄く似合っていた。

「身体は男だけど…… “私” ね、心は女の子なんだよ？」

「……………」

「この世界にきた時…… 新しい自分になるうって思った。最初は基
や幸仁も一線を置かれてたけど…… それでも——」

「お前って、スゲー可愛いよな」

え……、と慧の言葉が止まる。

結構恥ずかしい事言うつもりだし、俺は慧に視線を合わせないよ
う壁に背を預けて、目を閉じた。

「初めて会った時は、性別とか良く分かんなかったけどさ。中学、
高校って進むとさ…… お前がどれだけ可愛いか分かって来たんだよ
な」

ま、顔立ちの良さってだけなら基や幸仁も負けて無かったけど。

「だって、そこの女子より普通にレベル高いしさ。デザインが好
きだから、とか言ってレディースの服着てた時も、男だとは思えな
かったし」

「燈夜……………」

「けど、やっぱりアレだな。基や幸仁よりも一緒に過ごしていた時
間が長かった俺からしてみれば、」

一拍。

「慧は慧だな、うん」

「僕は、僕……？」

「そ。男だろうが女だろうが、一人称が僕だったり私だったりしても、長谷部慧は長谷部慧。俺の大切なダチだ」

昔、慧を苛めてた男子に言っただ事と同じ。

——コイツはボクと同じ人間！

性別だとか、病気だとか関係なく。俺は俺であるように、慧は慧なんだ。

「あ、あはは……なんか、凄くスッキリした。そっか……僕は僕……うん、そうだよ」

どうやら、心の蟠わたかまりは取れたみたいだな。

「あ、けどね燈夜」

「うん？」

「僕、心は女の子だからさ……好きになるの、男の人なんだよね」
「あゝ、そうか。そりゃそうだよね……」

ん？

なんでここでその会話？

ま、まさか……。

「お前……もしかして」

「……うん。僕ね——」

「基か幸仁のどっちか好きなんだな……」

「ええっ!？」

『この流れでっ!？ マスターってやっぱりお馬鹿さん!？』

だからそれを言うなって! 本当の事だから余計傷付くんだよ!

「ち、違うよっ! 僕が好きなのは、ずっと昔から燈夜なんだから

——!」

「え？」

「——……っ!」

ばっ、と。

綺麗にカードを避けながら、慧は部屋を出て行った。

「……え？」

『むう……なんか、ヤダな』

……え？

……マジ？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(後書き)

特に書くことが無い……シヨボーン。

感想、評価等お待ちしております!!

「絶対、好きになってもらうから」

あの日……慧から想定外の告白を受けて1週間が経った。

取り敢えず、俺はあれから慧と話していない。というより、俺が近付くとアイツが逃げるんだ。気持ちには分らないでもないけど。それと、マナも何故か俺の前に出てこない。何故……？
なにゆえ

俺の癒しがっ！？

と、本気7割冗談3割の事は置いていて。

俺がこのアカデミアについて分かった事がある。

「アイツだろ？ 第五位の癖に咲之宮結姫様に近付いてる野郎ってのは……」

「なんで第五位なんかが伝説のカードやエクシーズ使えるんだ？」
「結姫お姉さまに近付いたらコロス……」

えと、うん。

差別はそうだけど、何より結姫の人气が高いという事。同じくらい慧や基、幸仁の人气が高いという事。

………はあ。前途多難。

「あ、燈夜さん！」

………ついでに言っておくと、俺が結姫に近付いているんじゃない。事實は逆である。

「一緒に教室まで行きましょう?」

「……ああ」

殺気が凄く……大きいです……。

先日、俺は幾つかデッキを作り終え、残りの殆どのカードを購買に売った。勿論、高かった聖バリ（ミラフォ?）や奈落、激流とか死者蘇生を筆頭に。

すると、どうだろうか。俺は凄いいお金持ちになった。

……まあ、殆どは貯金と学費、寮費、その他諸々で消えてったケド。

貯金って大事だねっ。いつまでこの世界に居るか分かんないんだしなっ!

鋭い死線（誤字じゃない）に耐えながら教室に入った。
と――。

「っ……!?」

「……? どうしたんですか、燈夜さん?」

「い、いや……」

なんだ、今の……? 寒気……?

背筋が凍るような感覚。恐怖とかとは何かが違う感情が、身体を縮こまらせた。

そのまま一歩が動かせない。結姫が心配そうに俺を見つめ、少し離れた場所では慧がどうしたんだろっ、と首を傾げていた。

「……………そうか」

隣で、声。女性のトーンなのに、妙に低い。

「テメエ」が、オレの敵か」

振り向けない。口内に溜まった唾を飲み込んで、俺は唇を噛んだ。
——痛い。

その痛みは俺の身体の痺れを解かす。

「っ……！」

意を決して声がした方——結姫とは逆の方向——へ振り向く。

「だ、誰も居ない……？」

誰だったんだ……今の。それに、さっきの背筋が凍るような感覚は……？

「——燈夜さん？」

「あ、ああ……なあ、今隣に誰か居なかったか？」

「隣ですか？ いえ、誰も見ていませんけど……」

……一種のホラーだな。

「……うゝん、気のせいだな。昨日夜更かししてたからさ」

「……そうですか？ それなら良いんですけど……」

そうは言っても。

“気のせい”じゃないって、俺は心の奥底で薄々感付いていたんだ。

「はあ……階級毎のデュエルトーナメントですか」

俺は理解不能、と脳内で完結させながら呟く。

只今、今日の最終科目を終えたところ。正直、俺にとっては基礎中の基礎って言うって良い事を習い終えて、さあ帰ろう、と思ったところの連絡事項だった。

「半年に一回、第壱校では階級毎に代表者を1人選出し、トーナメントをする。その順位によって階級毎に評価やカードなどの賞品を与えている」

……………なあ。

それってさ、基本的に第一位の奴が優勝しないか？ 何、その変な大会……馬鹿なの？ 死ぬの？

つか、

「それって、俺が代表になるのは確定じゃんか……」

「そうなるな」

……さざりと言いますね、名も知らぬ一般教師さん。

「開催は明日の朝9時だ」

「早っ!?!」

もつと早く連絡しない、普通！？ 一晩しかデッキ調整はさせないってか！

「一応、トーナメント途中のデッキ入れ替えは認められているぞ」

……それ、余り意味無いよな？

何故なら、この世界の殆どが1人1つしかデッキを持っていないからだ。

理由としては簡単。

この世界では、カード1枚1枚の“価値”が高いからだ。

それと、この世界は地球とかとは違って、自分のデッキに凄い愛着を持つ。人によっては他のデッキを使うと、「浮気者！」とか言われる事もあるくらいだ。

「各階級の者は、開催までに代表者を決めておく事。それでは、解散！」

はあ……帰ってデッキ、調整するかね……。

そう思いながら立ち上がると、制服の裾を掴まれている感覚。

「ん……？」

そこに居たのは、かなり身長の高い女の子。俺の胸にも届かないし、見た目だけなら小学生くらいだろうか。

水色の髪はそれなりに長い。髪の毛をツインテールにしている、肩に触れるか触れない程度まで下りていた。

表情が読みにくいな。元々顔を窺ってその場を切り抜けるタ

イプである俺は、ちよつと厄介。

「えと……どうしたの？」

「……………逃げて」

「は？」

「ボクから……早く」

そう言うや否や、彼女はその場を立ち去る。まるで何事も無かつたかのように、颯爽と教室を出て行った。

「なんだっただ……？」

「うゝん……コレ入りたいけど……抜きたいカードがねー……」

これ、デッキ編集の時のあるあるだよな？

『私はこれがびみょーだと思っただけど……』

「俺も思っけどさ……ピン入れとくと役に立つんだよ……初手率高いし」

マナに協力して貰いながらデッキを改造中。

さっき、久し振りにマナが俺の目の前に出て来てくれた。

嬉しい……物凄く嬉しいんだけど、なんでこの1週間出て来てく

れなかったのか、理由は教えてくれなかった。くそう。

それはともかく。

部屋の中で試行錯誤していると、扉がノックされた。

「はい」

こんな時間に誰だ？ まだ飯前だし、殆どは自分の寮に戻ってると思うんだけどな……。

前みたいにカードが散乱している訳でもないので、スムーズに扉前へ。

開けると、なんか久し振りに間近で見たな、という感じの慧が。

「慧？ どうした？」

「あの……は、話したいことがあって」

「ん、そか。取り敢えず中に入れよ」

第五位の寮だけあって、暖房設備とかそついうのは皆無だ。中はまだ暖かいとは言え、外は冷えるだろう。

中に入って、前みたいに2人で布団の上に座り込む。

「んで、話ってなんだ？」

顔は赤いし、ずっと俯いているし……多分この前関連、だよな？ 勢いで俺に告白して来たあの事件。俺はまあ、この1週間である程度整理は出来たけど……本人は違っただろうなあ。

「あの……この前のこと、だけど」

やっぱり。

「その……小学3年生の時、僕を助けてくれたでしょ？」
「ん……まあ」

自覚は無いけど。

「その時から僕……その、す、すす……好きだったんだ。燈夜の事……」

「……そか」

「けど……僕は男だし……ずっと、告白出来なくて……数ヶ月間も、燈夜の事、忘れちゃってたし……」

あ、そっか。

俺はまだ数日しか経ってないけれど、基は半年、幸仁や慧は数ヶ月もの間この異世界に居たんだっけな。

「だから……ね。告白の事……忘れて欲しいんだ」
「……ん？ 忘れる？」

うん、と慧は首肯する。

「だって、気持ち悪いでしょ？ 男から好かれても……」
「男つつたつて、心は女なんだろ？」
「うん……けど、」
「なんか、お前らしくないな」
「え？」

なんつーか、こう……慧は笑ってなきやな。
ただでさえ、基は眉間に皺寄ってるし、幸仁はクールだし。

ん、なんて言ったら良いんだろう？ 直球で言うか？ それとも遠回しに……………。

なんて考えていると、再び扉がノックされる。
今度は誰だ？

慧に断りを入れて、扉へ向かう。
ガチャ、と相変わらずの小気味良い音が鳴る。

「…………お前…………」

そこに居たのは、さっき俺に「逃げて」って言った女の子だった。ただ違うとすれば、さっきはツインテールだったのが今度はポニーテールだった事。

…………？

いや、別人か。身長が違う。さっきは俺の胸くらいかそれ以下だったのに、今は俺と同じくらいだ。

それに、髪の色も。さっきの子は水色だったけど、目の前の子は銀髪。翠色の瞳も、紅だ。

なんで一瞬でも同一人物だっと思ってちゃったんだろ？

それにしても、顔立ちは瓜二つってくらい似てる…………双子？

「よお…………挨拶に来たぜ、一ノ瀬燈夜さんよ」

「ん…………ああ、うん。えと……………」

「オレは鴻おおとりソル。まっ、好きに呼んでくれて良いぜ。どうせ短い付き合いなんだからな」

はあ…………さいですか。

「じゃあな。今日は挨拶だけだしよ。ルナに宜しくな」
「あ……はい」

ルナ……？ さっきの背の低い女の子の事かな？
取り敢えず扉を閉めて、慧の下へ戻る。

「どうしたの？」

「いや……別に。それより、時間は大丈夫なのか？」

もうすぐ夕食の時間だ。DPで時間を確認した慧は、あっ！と
声を上げて立ち上がった。

「そろそろ戻らないと……」

「はは、やっぱりか。——なあ、慧」

「え？」

まあ、本当は色々言いたい事があつたんだけど、時間が無いし……
…1つだけ。

「忘れないからな、お前からの告白。そりゃ、今は世界の歪みやら
なんたらで返事は出来ないけど……」

ちなみにそれは俺の言い訳だ。

世間は俺を、“ヘタレ”と呼ぶだろう。うん、自覚してるよ？
ヘタレで何が悪い！

「お前はお前のまま、真っ直ぐ進めば良いだろ？ 初めて他人に力
ミングアウトするけど、俺って……まあ、男だろうと女だろうと大
丈夫な奴だから。別に気にしないし」

まあそれは、慧とずっと一緒に居て、なんか段々と吹っ切れて来たからなんだけど……閑話休題。

「つまりはアレだ、その……俺に好きになって貰いたいなら、努力すれば良いだろ？」

うわ、最低男の発言だ。自分で言いながらうわ、ってなる。

「……そうだね。うん。ありがとう、燈夜！」

笑顔。

そう、その笑顔だ。その笑顔を待ってたぜ、慧。

「絶対、好きになってもらうから。覚悟しておいてよ、燈夜！」

「絶対、好きになってもらうから」(後書き)

慧が吹っ切れた回。

性別なんて気にせず、慧はこれから燈夜にアタックして行くでしょうね。

そんなことよりっ(↑酷)、燈夜は男でも女でもOKだという新事実！

その辺りは作者と同じ。

所謂“バイ”ですね、分かります。

感想、評価等お待ちしております！！

「ライバル宣言、しちゃいます！」

「さあ……始めようか」

……いや、おかしいだろ、コレ。

目の前に居るのは、どう見ても教師だ。うん、間違いない。第五位の寮長をやってる、アキマサれんしょう彰正煉昌先生。彰正が名前だ。

無駄に爽やか顔、基や幸仁並かそれ以上の整った顔立ち。優男ってこういう人を言っんだなあ、なんて思ったり。

「……いやいや、え？」

今日は朝から、疲れる事ばかりです。

今日は朝から、マナの機嫌が悪かった。

何故かずっと姿を現したまま、俺の隣で頬を膨らませたりしていた。

俺が話し掛けると、ぷいっ！ という感じで顔を背けられたり。それだけで俺の一日の活力が無くなった気がする。

しかも、今は他の人にも姿が見える状態。そろそろ登校しないと行けない時間帯だから、姿を消してもらわないと……。

「えと……ま、マナ？」

『……何？』

……怖。

「いや、あの、えと……ど、どうして機嫌悪いのかな、と」

『……マスターの所^{せい}為だもん』

「へ？」

俺が何かした……ってこと？　いつ？　ま、まさか……俺が寝てる時に何かしちまったのか！？

『……？　なんで土下座してるの？』

「なんかしなきゃイケナイ気がした」

『………ぷっ』

暫くそうしていると、マナが耐え切れない感じで吹き出した。
そして、あはは……、と無邪気に笑い始めた。

『ははは……。うん、許す。マスターって昔からそうだし……それに、嫌われちゃったりするよりはマシだもんね』

「……？」

なんか良く分からないけど、許してもらえた……？　つか、昔か

らって……視てたのか、俺のこと？

なんて疑問に思っていると、扉がノックされる。

「燈夜ー？ 一緒に行こうーよー」

「ん……慧？」

「わ、私も居ますよっ！」

「……結姫も？」

第一位と第二位の人が揃ったぞ。

……まあ、良いか。

俺はディスクと複数のデッキの入ったバッグを持つと、DPをポケットにしまい玄関へ。

扉を開けると………。

（え？）

何故か、慧と結姫が見詰め合って………うん、嘘。睨み合っていた。
Why？

「え、と……おはよう、2人とも」

「おはよう、とう……」

「おはようございま………」

……？ なんだ、2人とも？

『……あ。ゴメン、マスター。姿消すの忘れてた』

……なん、だと。

つか、慧はマナの事、知ってるだろっ！？

「だっ、誰ですかあの人はっ!？」

「いや、えっと……マナ、です」

「そっか……そういえば、マナちゃんって燈夜とずっと一緒なんだっけね……」

「いつ……!？」

ジト……。何故か結姫に睨まれるマナ。その睨み自体は怖くなく、どちらかといえば可愛い部類なんだけど……睨む理由が良く分からない。

『あはは。うん、良い機会だね』

……何が？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

マナはさつきよりもさらに現実味を帯びた。気配というか、温度というか……そういう物がハッキリしたように見える。
言うならば、普通の人間みたいな感じ？

そんな感じになったマナは、突然俺の腕に抱き付き……ってええっ!？

「2人には、ライバル宣言しちゃうす!」

「っっ!？」

「ライバルて……お前、デュエル出来たっけ？」

「っっっ!？」

つか、胸当たってるから！ その格好で近付いちゃめえええ。

「お……俺、先に行ってるからなっ！」

マナから逃れ、俺はその場から逃走。精霊のマナは近くじゃなくて良いのかな、なんて頭の片隅で思いながら走った。

……朝から凄く疲れた。そんな気がする。

んで、9時少し前。階級別トーナメント開催まで後数分、と言った感じ。

教室の液晶板に写されたトーナメント表と連絡事項を呼んで、俺は啞然としていた。

例えば。

第一位から第五位の代表者の他にも、教師群で1人、大会に参加する人が居る、とか。

教師と第一位以外の方が優勝した場合、その者は昇格する事が出来る、だとか。

優勝した人は、出来る限りの願いを叶える事が出来る、とか。

第一回戦は、第五位の代表者……俺対、第五位寮長の彰正先生、とか（これ一番大事）。

——んで、回想終わり。

場所はデュエル場。1階はデュエルスペースになっていて、2階以降は全て観客席になっている。

その観客席に何故か並んで座っている慧、結姫。俺が視線を送ると、2人とも手を振ってくれた……。のは嬉しいんだけど、男からの死線が大きいです、ハイ。

……良く見ると、慧、結姫と並んで座っている人も見覚えがある。

「鴻マナ……だよな？ 多分」

それはともかく、マナは既に精霊化しています。今回は出番が無いから、俺の傍には居ないけど。

『では、階級別デュエルトーナメント第一回戦、第五位代表者一ノ瀬燈夜対、教師群代表者彰正煉昌先生、始め！』

「先攻はどうぞ、一ノ瀬君。第五位の力、僕に見せてみてよ」

「……俺のターン、ドロっ！」

ターンランプは向こうは光っていたはずなのにな……。流石、教師群の中で一番人気が高い先生なだけある！

「俺は——《サイレント・マジシャン LV4》を召喚！」

「へえ……」

イラストでは女性と分かり難い魔術師……。サイレント・マジシャンが場に現れる。

幼い子供だから、力も弱い。けれど、

「《レベルアップ！》発動！俺の場に居るLVと名の付いてるモンスターを墓地に送り、そのモンスターに記されているモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚する！来い、《サイレント・マジシャン LV8》！！」

LV8……それは、子供が大人に成熟した姿。攻撃力は3500もある。

「攻撃力3500のモンスターが、手札2枚消費で出てくるとはね……」

「それに、このカードは相手の魔法の効果を受けませんよ」

そう、それが地味に効くんだよね。

ライバルだったり、地割れ、地砕き……その他諸々。

俺の好きなモンスタートップ5に君臨するぜ！

『ありがとう、燈夜様』

「……へ」

『さあ、一緒に戦いましょう』

………空耳ツスか？ 空耳ツスよね？
気を取り直して、と。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「では僕のターン、ドロー。僕は《グリーン・ガジェット》を召喚。効果により、デッキから《レッド・ガジェット》を手札に加えるよ」
「っ……ガジェット、か」

結構な古株ながら、結構な頻度で大会に参戦していた強者だ。^{つわもの}

ただ、俺が知ってるガジェットでは除去が多めだとは言え、地砕きとかが多い。LV8にはそれらが効かないから、怖いのは罠カード……。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚、か。

「……バトル！ 《サイレント・マジシャン LV8》で《グリーン・ガジェット》に攻撃！」

「モンスターの召喚は無し、か。残念だね……^{トラップ}罠発動、《狡猾な落とし穴》！ 僕の墓地に罠カードが無い時に発動出来る！ フィールド上のモンスターを2体破壊する！」

げ……。

今、フィールドに居るのはグリーンとLV8だ。

「ゴメン、サイレント・マジシャン……守れねエ」

『仕方ないわ。また、近い内に』

……また喋った。

………コイツも精霊、って奴だろうか。

まあ、良いか。

「メイン2！ 俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてター

ン終了！」

「僕のターン、ドロー。さて、厄介なモンスターは居ないし動こうか……僕は手札より、《ギアタウン歯車街》を発動する」

が、ガジェットはガジェットでも古代の機械関連の方が！

除去ガジェ、代償ガジェ、マシンガジェ……エクシーズは無いにしても、ある程度の候補の中でまさかそれとは。

こりゃ……パワーで勝てるのはサイレント・マジシャンだけだぜ。

「その顔じゃ、《歯車街》の効果は知ってるみたいだね。聡明で何よりだ。このカードの効果により、アンティーク・ギアと名の付いたモンスターが必要とするリリースは1体少なくなる。そこで僕は、アンティーク・ギアピースト《古代の機械獣》と通常召喚！」

「うわ…… よりにもよってそれが……」

歯車で出来た街に、機械で出来た獣。LV6で攻撃力は2000と少なめだが、効果が厄介だ。

まず、《古代の機械獣》が攻撃する時はダメステ終了時まで魔法罨カードを使えない。つまり《次元幽閉》だったり《炸裂装甲》、攻撃宣言した後だと《月の書》などが打てないということだ。

2つ目の効果は、《古代の機械獣》が戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるということ。

《巨大ネズミ》、《仮面竜》などのリクルーター、《クリッター》などのサーチャー、《異次元の女戦士》なども無効化、ということだ。

「続いて、《ダブル・サイクロン》発動。僕の場合の《歯車街》と、君の場にある左側の伏せカードを破壊したいな」

「うわー……やべ」

破壊されたのは、《奇跡の軌跡》ミラクルーカスだ。

「へえ……相手にドロウさせる代わりに、攻撃力を1000上げて2回攻撃させるカードか。確かにサイレント・マジシャンと相性は良いね」

……まあ、そのモンスターが攻撃した時の戦闘ダメージが0になるデメリットもあるけど。

「それじゃあ、破壊された《歯車街》の効果を発動。デッキより、アンティーク・ギアガジェルドラゴン《古代の機械巨竜》を特殊召喚！」

本当に、大きいな……。

つい見上げて、息を吐いてしまう。

戦意が喪失してしまいそうな程の迫力。

……このデッキでアイツに対抗出来る攻撃力を持つてるの、サイレント・マジシャンただぞ。サイマジ以外で最高攻撃力は1600なんだし。

「バトルフェイズ。まずは《古代の機械獣》でセットモンスターに攻撃！」

「く……モンスターは《見習い魔術師》です」

「リクルター、だね。けれどギアビーストの効果により、無効化されるよ」

……分かってるよ。

何の効果も発動されず、《見習い魔術師》は破壊され墓地へ行く。

「続いて、《古代の機械巨竜》で直接攻撃！」

「う、うわああああああっ！！」

一ノ瀬燈夜LP4000↓1000.

こ、こええ……つい俺も大声を出しちゃった。

結姫を襲った不良さん。大袈裟じゃね？とか思ってしまったマジすんません。こりゃ、大袈裟にもなりますね、ハイ。

「それじゃ、僕はターンエンドかな」

「くう……俺のターン、ドロー！」

ふう……落ち着け。

まだ大丈夫。

「その眼……まだ諦めてないみたいだね。さあ、君の力を魅せて見て」

「ええ……行きますよ！俺は魔法カード、《トレード・イン》を発動！《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて、2枚ドロ！つ！く……まだだ！速攻魔法、《手札断殺》！お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドロー！」

「成る程ね。サイレント・マジシャンと相性が良いカードをとことん積んでるみたいだね」

勿論。

このデッキの主役は、サイマジだからな！

「——良しっ！リバーカードオープン！《リミット・リバーズ》！戻って来い、《サイレント・マジシャン LV4》！」

攻撃力が1000の幼いサイマジが復活する。
けど、ゴメン。

子供の君は正直……うん、使い回し。

「魔法カード、《レベルアップ!》」

2枚目だぜ……引けて良かった、ホント。

「もう墓地に2枚あるけど……もう1枚はまだデッキの中だ!」
サイレント・マジシャン LV8《!!!》

『今度こそ、行きましようか、燈夜様』

「——ああ! バトル! 《サイレント・マジシャン LV8》で
《古代の機械巨竜》にアタック!」

サイマジが放った炎は小さく、とても頼りない。けれどその破壊力は、古代の巨竜なんて目じゃないぜ!

「く……っ!」

彰正煉昌 LP4000 ↓ 3500 .

「俺はこのまま、ターンエンド」

「まさか、ガジェルドラゴンが倒されるなんてね……君が第五位とは、アカデミアも質が落ちたというか」

いや、それ教師が言っちゃ駄目な気がするよ? それに俺の場合、編入したてだからっていう理由があるんだし。

「けれど……僕が担当する唯一の寮生が君とは、僕も鼻が高いよ、燈夜君」

「はは……ありがとうございます」
「さて……僕のターン、ドロー！」

……彰正先生は、何を引いた？

俺が緊張に身を固めていると、彰正先生はふふ、と柔和に笑った。

「……カードを信頼する事によって、デッキは応えてくれる。それはどの世界でも一緒だと僕は思ってる」

「……？ はあ」

「事実、君のデッキも応えてくれている。あの状況を、《ブラック・ホール》などのパワーカードを使わずに突破されるとは正直、思っていないかった」

褒めて、くれてるんだよな……？

なんか実感が湧かない褒められ方だ。

「……僕のデッキも、応えてくれたよ。燈夜君」

「え……？」

「僕は《レッド・ガジェット》を召喚。効果により、《イエロー・ガジェット》を手札に加え、バトルフェイズに移行する！」

……？ バトルフェイズ？

パワーでサイマジに勝てない事は誰しもが分かっている事……魔法も効かないし………はっ！？

ま、まさか……？

「気付いたかい？ 《古代の機械獣》で《サイレント・マジシャン LV8》に攻撃！」

……来る！

「ダメージステップ、《リミッター解除》！ 僕の方に居る機械族モンスターはエンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力が倍になる！」

《古代の機械獣》 ATK2000 ↓ 4000 .

《レッド・ガジェット》 ATK1300 ↓ 2600 .

「くそ…… もうギアビーストが攻撃宣言してるから伏せカードが使えない……」

俺の伏せカードは《魔宮の賄賂》。これが使えないんだもんなあ……。

「スゲエな…… 先生の言った通りだ。カードを信頼してれば、本当にデッキは応えてくれるんだな……」

「そう。最近の子は、それを分かっではくれないんだけどね……」

……確かに、そうかもしれない。

けど——！

「……先生なら、分かるよな。ダメージステップじゃなくて、ダメージ計算時に打てるモンスターカードの事」

「ん……っ！ まさか……!?!」

「本当に、デッキは応えてくれたぜ……！ 最後の手札の効果を使う！ 《オネスト》お——！」

《サイレント・マジシャン LV8》 ATK3500 ↓ 7500 .

「返り討ちにしてやれッ！」

『流石……新しい主人は違うわね。力が漲ってくるわ』

バトル続行！

『「サイレント・バーニング！」』

彰正煉昌LP3500↓0・

そんなこんなで、俺はデュエルに勝利した。

「ライバル宣言、しちゃいます!」(後書き)

まだ連載始めて10日しか経って居ないのに、メインの『遊戯王 僕らの進んで行く道』を超える勢いのLEGENDS。

……更新速度って、大切だね。

感想、評価等お待ちしております!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs ~ 伝説の名の元に ~

2011年11月10日15時05分発行